

テオクの分類と特徴

岡野ひさの

1. はじめに

テオクは日常よく使われるが、使わなくても事足りることも多い。それはつまり、何か確固としたコトを表すのではないということであり、日本語を外国語として学ぶ学習者には難しいことであるし、またそれを教えなければならない教師にとっても難しいことである。テオクにはどのような種類があるのか、またテオクの一般的な用法にはどんな特徴があるのか、考察することが本稿の目的である。

そのためまず、テオクに関して既存の辞書の分類を示し、それをもとに2つの視点から分類し、下位分類を加えて5つの分類を提示する。次に、テオクが基本的に何を表すのかを示し、それをもとにテオクの特徴を考察する。

2. 辞典の分類

まず、既存の辞典がテオクをどのように分類しているか、みってみる。『日本語基本動詞用法辞典』（小泉他編 1989、以下『用法辞典』）では、補助動詞のオクを以下のように分類している。（以下、文字の強調はすべて本稿筆者による。）

「(12) **動作や状態をそのまま続けさせる。**例 先生は生徒達を遊ばせておいた。電灯を消しておく。解決をつけないでおく。」「(13) **前もって準備する。**例 学生達は教科書を読んでおいた。品物を注文しておく。食料を

買っておく。」「(14) さし当たってあることをする。**例** 秘書は電話番号を聞いておいた。名刺を受けとっておいた。」(p. 86)

また、『教師と学習者のための日本語学習辞典』(グループ・ジャマシイ 1998、以下『学習辞典』)によれば、テオクは以下のように定義されている。

「ある動作を行い、その結果の状態を持続させるという意味を示す。文脈によって、一時的な処置を表したり、将来に備えての準備を表したりする。」(p. 247)

『用法辞典』の「(13) 前もって準備する」と『学習辞典』の「将来に備えての準備」は同じことを示している。また『用法辞典』の「(14) さし当たってあることをする」と『学習辞典』の「一時的な処置」も同じことを表している。従来テオクには基本的にこの二つの用法が認められていることが分かる。さらに、『用法辞典』では「(12) 動作や状態をそのまま続けさせる」として、テによって表される動作を行わない「放置」を設けている。

3. 本稿の分類

3-1. 分類の視点

『用法辞典』が指摘する (12) と (13)(14) の違いは、テオクを概観する場合の根本的な視点の1つである。また、『用法辞典』における「(13) 前もって準備する」と「(14) さし当たってあることをする」の違い、『学習辞典』における「将来に備えての準備」と「一時的な処置」の違いも、テオクを概観する場合の根本的な視点の1つである。これをもとに、本稿ではテオクを大きく2つの視点で分類する。

その1つは、テで表される動作をするのか、しないのかという点、つまり「放置」か否かという点である。前述の『用法辞典』における (12) か、あるいは (13)(14) か、という区分である。「放置」に対する用語として、本稿ではテで表される動作をすることを「処置」と呼ぶことにする。つまり、視点の

1つめは「放置」か「処置」かという点である。

視点の2つめは、テオクが未来を考慮して使われたものか、現状に対して使われたものかという点である。未来を考慮して使われたとは、『用法辞典』「(13) 前もって準備する」と『学習辞典』「将来に備えての準備」に相当し、現状に対して使われたとは、『用法辞典』「(14) さし当たってあることをする」と『学習辞典』「一時的な処置」に相当する。

以下の例はどちらも「放置」だが、(1) は未来を考慮して使われているのに対し、(2) は現状に対して使われている。

(1) A: ドア、閉めましょうか。

B: **もうすぐCさんが戻ってくるから**、開けておいてください。

(2) A: ドア、閉めましょうか。

B: **暑いから**、開けておいてください。

また、以下の例はどちらも「処置」だが、(3) は未来を考慮して使われているのに対し、(4) は現状に対して使われている。

(3) A: ガムテープなんか持って、どうするんですか。

B: **あした引っ越しだから**、荷造りしておこうと思って。

(4) A: ガムテープなんか持って、どうするんですか。

B: **窓ガラスにひびがはいったから**、とりあえず貼っておこうと思って。

本稿では、例 (1)(3) のように未来を考慮して使われているテオクを「未来考慮型」、例 (2)(4) のように現状に対して使われたテオクを「現状考慮型」と呼ぶことにする。(1)~(4) の例で分かるように、2つの視点は完全に異なるので、同列に扱われるべきではない。

3-2. 時間に関する基準

本稿では時間的基準を、テによって動作が行われる時点、つまり出来事時点におく。だから、現状とは出来事時点における状況であり、未来とは出来事時点より時間的に後のことである。

具体的には、発話時点において過去あるいは未来であっても、出来事時点において現状であれば、現状考慮型となる。だから次のような例も現状考慮型である。

(5) 洗濯機が止まったから、洗濯物を干しておきました。

(6) 洗濯機が止まったら、洗濯物を干しておいてください。

「洗濯機が止まった」は、発話時点を基準にすると、(5) では過去、(6) では未来であるが、「洗濯物を干す」時点、つまり出来事時点を基準にすれば、(5)(6) とともに現状となる。

一方、発話時点からみると未来ではなくとも、出来事時点からみて未来であれば、未来考慮型となる。例えば、次のような例である。

(7) あなたが来るから、ケーキを焼いておいたのよ。

例(7)では発話時点において、「あなたが来る」は過去であるが、「ケーキを焼く」出来事時点においては、未来である。だから、(7) は未来考慮型となる。

3-3. テオクが不適切な未来考慮型

未来考慮型にはテオクが不適切になる場合がある。次の例を見ていただきたい。これらはどれも許容しがたい文である^{註1}。

(8) *9時までに家に帰っておきます。9時以降お電話をください。

(9) *出発は9時です。9時にはバスに乗っておいてください。

(10) *試験開始は9時です。9時には受験番号の席に座っておいてください。

例(8)のような動作主の移動つまり場所の変化、(9)のような動作主の位置の変化、(10)のような動作主の態勢の変化などを表す場合、言い換えれば動作主の物理的存在の変化を表す場合、テオクは普通用いられない。

しかし、例(8)(9)(10)と同じ動詞のテアルが許容される場合がある。例えば次のような場合である。

(11) 本当は中国正月に帰りたいんですが、2月は忙しいから1月のうちに国に帰っておきます。

(12) もうロンドンには来られないでしょうから、二階建てのバスに**乗って**おきます。

(13) これが社長の椅子ですか。座ってもいいんですか。こんなチャンスなんて二度とないでしょうから、**座って**おきます。

同じ動詞であるにもかかわらず、例 (8)(9)(10) は許容されず、例 (11)(12)(13) は許容される^{注2}。これが示すように未来考慮型のテオクは、2つに分けることができる。

3-4. 未来考慮型の下位分類

では、例 (8)(9)(10) と例 (11)(12)(13) の違いは何だろうか。例 (8)(9)(10) は、動作主の場所・位置・態勢が変化した後の状況が、未来、具体的には9時の時点で保たれていることが要求されている。言い換えれば、テによって表された動作による結果の残存が要求されている。この場合、結果の残存とは、動作主自身の変化した状況だから、次のようにテイルで表わすことができる。

(14) 9時までに家に**帰っています**。9時以降お電話をください。

(15) 出発は9時です。9時にはバスに**乗って**いてください。

(16) 試験開始は9時です。9時には受験番号の席に**座って**いてください。

それに対して例 (11)(12)(13) は、未来においてテで表される動作「帰る」「乗る」「座る」の遂行可能性が限りなくゼロに近いから、出来事時点で動作を遂行することを表している。動作による結果の残存が要求されているのではない。

動作主の場所・位置・態勢の変化などを表す場合は、顕著にその違いが出るが、このような動詞ではなくとも、この二つの分類は存在する。例えば次のような例である。

(17) 午後**友達**が来るから、ケーキを焼いておきます。

(18) 午後は**忙しい**から、午前中にケーキを焼いておきます。

例 (17) は、テで表される動作の結果の残存（焼かれたケーキ）が、未来（午後）において要求されている。それに対して (18) は、動作の遂行（ケーキを焼くこと）が未来（午後）において阻害されるため、出来事時点における動作の遂行が要求されている^{注3}。そこで、前者を「結果残存要求型」と、後者を「動作遂行要求型」と呼ぶことにする。前者が、いわゆる典型的な「準備」と言われる用法である。

結果残存要求型の中には、はっきりと結果が見えない場合もある。例えば次のような場合である。

(19) 試合中にばてないように、走り込んで**おきます**。

(20) 授業を聞いてわかるように、教科書を読んで**おきます**。

例 (19) は、「走り込む」という動作によって養われた体力（結果の残存）が、「試合中にばてない」という未来の身体的状態のために要求されている。(20) では、「教科書を読む」という動作によって得られた知識（結果の残存）が、「授業を聞いてわかる」という未来の知識の状態のために要求されている。これらは (17) のケーキのように明確ではないが、未来において要求される、動作の結果による残存である。

以上の分類とその例文は、次の表のようにまとめることができる^{注4}。

	未 来 考 慮 型		現 状 考 慮 型
	結果残存要求型	動作遂行要求型	
放 置 型	(1)	—	(2)
処 置 型	(3)(7)(17)(19)(20)	(11)(12)(13)(18)	(4)(5)(6)

4. テオクの特徴

4-1. 放置型と処置型

3では2つの視点によってテオクの分類を試みた。その視点の1つは、テオ

クによって表される状態がなぜ必要なのかという点で、大きく未来考慮型と現状考慮型に分けられた。もう1つは、テで表される本動詞とオクという補助動詞のどちらが重要なのかという点で、放置型と処置型に分けられた。本動詞の動作を要求しない放置型は、補助動詞の部分オクに焦点が当たっているわけで、実際どんな場合でもオクがなければ非文となる。

一方、動作を要求する処置型は、比較的テで表される動詞の部分に焦点が当たっていると考えられ、テオクがなくても非文とならない場合も多い。事実3で示したテオクの例は、テオクがなくても許容できる。そこで以下、処置型のテオクが基本的に何を表すのかを示し、それをもとにテオクの特徴を考察する。

4-2. テオクが基本的に表すもの

テオクに関して、既存の辞典・事典や文献はどのように説明しているのだろうか。以下に列挙するが、別個に放置型に言及している場合は、それを省略した。また、⑥は再掲である。

- ①「あらかじめ準備工作として動作をして、その効果を期待するような場合」
（佐久間 1966: 178）
- ②「対象を変化させて、その状態を維持させること」（吉川 1973: 267）
- ③「ある目的のために準備としてある行動を行うことを表す」（益岡・田窪 1992: 17-18）
- ④「状態を変化させ、その結果の状態を持続させることを表したり、ある時までにある動作や一時的処置を行うことを表す」（高見沢他 1997: 122）
- ⑤「行為の結果についての発話者の意図が機能の主眼」（梶井 1997: 90）
- ⑥「準備として何らかの動作をすること」（グループ・ジャマシイ 1998: 247）
- ⑦「何かのため（もちろんその動作の後のこと）にその動作が行われるということを表す」（森山 2000: 96）

これらは本当に処置型のテオクを的確に言い表しているのだろうか。3で示

した分類の典型的な一部を表しているにすぎないのではないだろうか。以下、テオクが不適切な場合と許容される場合を比べ、処置型のテオクが基本的に何を表すのか、考えてみる。

次の例は、込んでいる駐車場に車を止めようとしている客（A）と係員（B）の会話だと仮定する。

(21) a. A：この車、止められますか。いっぱいですか。

B：止められますよ。

b. A：*この車、止めておけますか。いっぱいですか。

B：*止めておけますよ。

a は問題がないが、b は許容しがたい。このように純粹にその動作（車を止める）の可否を問う場合は、テオクは用いられない。

また、次の (22) は現状考慮型に似ているが、テオクのある b は不適切である。

(22) 高校でタバコを吸っていると、教師が近づいてくるのが見えた。見つかりと退学なので、あわてて吸っていた

a. タバコをポケットに入れた。

b. *タバコをポケットに入れておいた。

これに対して、同じ「タバコをポケットに入れた」でも次の (23) ではテオクが許容される。

(23) 禁煙を破って、帰り道タバコを買ってしまった。家に着く前に捨てようと思ったが、惜しくなって、

a. タバコをポケットに入れた。

b. タバコをポケットに入れておいた。

例 (22) と (23) の違いは何だろうか。(22) の場合、現状（タバコを吸っているのを教師に見つかる）に対して、動作（タバコをポケットに入れる）が重要であって、それによって生じる、状態（タバコがポケットの中にある）に

は意味がない。一方、(23) では (22) と同じように現状 (タバコを吸っているのを家族に見つかる) に対する動作 (タバコをポケットに入れる) も重要であるが、それと共に、動作によって生じた状態 (タバコがポケットの中にある) も重要である。なぜなら、その状態に意味がある (後でタバコを吸う) からである。例 (22) と (23) の違いから、動作には意味があるが、その動作によって生じる状態に意味がない場合は、テオクは用いられないと言える。そして (23) のようにテオクを用いると、意味のある状態を話し手が意図的に作り出したことがわかる。

以上 (21) のように動作自体の可否を問う場合や、(22) のように動作だけが重要である場合に、テオクが不適切となる。一方、(23) のように意味のある状態を意図的に作り出す場合は、テオクが適切となる。これらの点から、テオクに関して次の点が指摘できる。

処置型のテオクは、**動作によって意味のある状態を意図的に作り出す**ことを表す。

例 (23) は現状考慮型とも未来考慮型の結果残存要求型とも解釈できるが、未来考慮型の動作遂行要求型のテオクについても、「動作によって意味のある状態を意図的に作り出す」ことを表すと言える。例えば、例 (12) 「もうロンドンには来られないでしょうから、二階建てのバスに乗って**おきます**。」では、「二階建てのバスに乗る」ことによって、経験の有無という話し手の内面の状態が変わると考えられる。そして、それを経験することは話し手にとって意味のあることなのである。

また、「動作」の中に「意図的に何もしないこと」あるいは「意図的にそのままにすること」を含めれば、処置型のテオクが基本的に表す「動作によって意味のある状態を意図的に作り出す」ことは、放置型にも適用できる。

4-3. 意志と時間

テオクに関してすでに指摘されている点を、その基本的な「動作によって意

味のある状態を意図的に作り出す」という点から考えてみる。

まず、意志のない動き、あるいは意志でコントロールできない動きを表す場合テオクは不適切になる、という点である。例えば、次の (24)(25) の a は許容されるのに対し、同じ動詞を用いている b は許容されない。

(24) a. 田に水が流れ込むように、川の流をせき止めておいた。

b. *流木が川の流をせき止めておいた。

(25) a. 帰る道が分かるように、道におはじきを1つずつ落としておいた。

b. *うとうとして、いつのまにか持っていたバッグを落としておいた。

テオクは「動作によって意味のある状態を意図的に作り出す」ことを表すのだから、当然意志のない動き、あるいは意志でコントロールできない動きを、テオクで表現すれば、不適切になる。

次に、時間表現との共起関係だが、処置型に関して次のような点が指摘されている。例えば、次の (26)(27) をみていただきたい。「開ける」という短時間で行える動作は、「9時から」「9時まで」という完全に時間的幅を示す表現とは共起しにくく、(26) のような点的な時間や (27) の「までに」のように時間的幅の中の一点を表すような時間表現と共起する。一方「開けておく」になると、(26) の「9時に^{註5}」のように完全な点的時間とは共起しにくく、(27) の「9時から」「9時までに」「9時まで^{註6}」というような、たとえそれがその幅の中の一点を表していようとも、時間的幅を示す線的な時間と共起する。

(26) a. このドアは9時に開けます。

b. ??このドアは9時に開けておきます。

(27) a. このドアは9時??から/までに/??まで 開けます。

b. このドアは9時から/までに/まで 開けておきます。

テオクは「意味のある状態を意図的に作り出す」ことを表し、状態とは、一定時間不変であることを意味する。一定時間不変であることが、点的な時間ではなく、線的な時間と結びつくのは当然であろう。

4-4. 動作主以外の会話当事者の関与

次に、依頼や命令など聞き手にある動作をさせる発話、および行動表明など話し手の動作を表す発話について考えてみたい。これらの発話においては、動作主以外の会話当事者、つまり依頼や命令の話し手、および行動表明の聞き手は、普通その動作遂行に介在できない。

テオクが「動作によって意味のある**状態を意図的に作り出す**」ことを表すすれば、依頼や行動表明などにおいては、動作主がその状態を作り出すまで、動作主以外の会話当事者が介在できないはずである。「動作主がその状態を作り出すまで、動作主以外の会話当事者が介在できない」とは、どういうことなのだろうか。この点について、具体的に考えてみたい。

次の(28)は、蛍光管の取り換えを依頼する場面であるが、蛍光管のある場所はAのいる事務室だとする。

- (28) a. A: 蛍光管を取り換えてほしいんですけど。
 B: わかりました。すぐ取り換えます。
- b. A: *蛍光管を取り換えて**おいて**ほしいんですけど。
 B: *わかりました。すぐ取り換えて**おきます**。

例(28)bはABともに不適切になる。これはBの動作遂行現場にAがいて見ていたり話しかけたりするからである。このように、aのような動作だけの依頼や行動表明では、会話当事者がその動作(蛍光管を取り換える)遂行自体に関与しなければ問題ないが、bのようなテオクによる依頼や行動表現では、その動作遂行現場で依頼主が見ていたり話しかけたりするだけでも不適切になる。つまり、会話当事者は動作主が「**状態を作り出す動作遂行の「場」に介在できない**」ということである。因みにBの動作遂行現場にAがいない、次の(29)ではテオクが許容される。

- (29) A: トイレの蛍光管、取り換えて**おいて**ほしいんですけど。
 B: わかりました。すぐ取り換えて**おきます**。

ここでいう「場」とは、物理的な意味ではなく、概念的な意味である。例えば、同じ事務室の後ろの席の人に「この書類、日本語に訳しておいて」と言うことも可能である。書類を日本語に訳す概念的な「場」は狭いものであり、そこに依頼主が入り込まなければ問題は無い。

4-5. 相手と一緒にする動作

依頼や行動表明であっても、動作だけのそれであれば、会話当事者が動作主の動作遂行に介入できる場合がある。その1つは、「(私と)一緒に歌って」「(あなたの仕事を)手伝います」のように相手と一緒にする動作で、その相手が会話当事者の場合である。このような場合、テオクが用いられると、どうなるのであろうか。

(30) a. *(私と)一緒に歌っておいて。

b. ?(あなたの仕事を)手伝っておきます。

aの依頼は許容できないが、bの行動表明は「時間のあるうちに(あなたの仕事を)手伝っておきます」という未来考慮型の動作遂行要求型であれば許容できる。(30)aも次のように、相手に対する直接的な依頼でなければ、可能である。

(31) 後で一人で歌うより、いま私と一緒に歌っておいたほうがいいよ。

4-6. 相手を必要とする動作

動作だけの依頼や行動表明で、会話当事者が動作主の動作遂行に介入できる場合の2つめは、「明日8時に起こして」「(あなたに)後でお話します」のように相手を必要とする動作で、その相手が会話当事者の場合である。このような場合、テオクではどうなのだろうか。

例えば、次の(32)が発話されたとする。

(32) a. A: 起こしてください。 B: はい、起こします。

b. A: 起こしておいてください。 B: はい、起こしておきます。

Aが依頼でBが行動表明だから、例(32)のaとbを比べると、一般に「起

こす」が、aではAに対するBの動作、bでは第三者に対するBの動作だと理解される。もちろんaが第三者に対するBの動作である可能性も十分あるのだが、bと比べた場合、aはAに対するBの動作だと理解される可能性が非常に高い。

この理由は次のように考えられる。動作だけの依頼や行動表明では、会話当事者が動作主の**動作遂行に介在できない**だけだから、(32)aでは「起こす」動作をBがすれば問題はない。しかし、テオクの依頼や行動表明では、会話当事者が動作主の**動作遂行の「場」に介在できない**から、たとえBの「起こす」動作自体には介在しなくても、Aが起こされると、Bの動作遂行の「場」にAが介在することになり、許容されなくなる。

ただし、これには例外がある。次の(33)は情報を受け取る動作、(34)は物を受け取る動作、(35)は情報を渡す動作、(36)は物を渡す動作であるが、(33)～(36)のどれも例(32)と同様の点が指摘できる。

- (33) a. A：聞いてください。 B：はい、お聞きします。
 b. A：聞いて**おいて**ください。 B：はい、お聞き**してお**きます。
- (34) a. A：もらってください。 B：はい、いただきます。
 b. A：もらって**おいて**ください。 B：はい、いただ**いてお**きます。
- (35) a. A：話してください。 B：はい、お話しします
 b. A：話して**おいて**ください。 B：はい、お話し**してお**きます。
- (36) a. A：渡してください。 B：はい、お渡しします。
 b. A：渡して**おいて**ください。 B：はい、お渡し**してお**きます。

しかし、(33)～(36)のbが次のようになると、行動表明では、Aに対するBの動作として許容できる。

- (37) A：??私の話を聞いて**おいて**ください。
 B：じゃ、お聞き**してお**きます。
- (38) A：??これ、もらって**おいて**ください。

B：じゃ、いただいておきます。

(39) A：??私に話しておいてください。

B：じゃ、お話ししておきます。

(40) A：??それ、私に渡しておいてください。

B：じゃ、お渡ししておきます。

動詞オクには「母は私をおいて家を出ていった」のように「残す」という意味がある。情報や物を受け取る動作と渡す動作は、実際に情報や物を動作主あるいは相手に「残す」動作である。そして「聞く」「いただく」「話す」「渡す」などは、その手段である。行動表明の場合、話し手側か聞き手側かにかかわらず、情報や物を手元に「残す」場合は、たとえ相手が会話当事者であろうと、テオクが許容されるのだと思われる。

5. おわりに

以上、テオクに関して新たな分類を提示し、さらに、テオクが基本的に何を表すのかを示し、それをもとにテオクの特徴を考察した。

分類に関しては、以下のような分類を提示した。

放置型	-----	放置型
未来考慮型の 結果残存要求型	-----	現状考慮型
処置型	処置型	処置型
未来考慮型の 結果残存要求型	未来考慮型の 動作遂行要求型	現状考慮型

また、上記分類上の処置型が表すのは、基本的に「動作によって意味のある状態を意図的に作り出す」ことであるとし、それをもとに以下の1と2を確認し、3を指摘した。

1. 意志的な動作である。
2. 線的時間と共起する。
3. 依頼や行動表明において、動作主ではない会話当事者は動作遂行の「場」に介在できない。ただし、情報や物を「残す」行動表明では許容される。

最後に、テオクが基本的に表す「動作によって意味のある状態を意図的に作り出す」ことと、上記の分類とがどう関わっているかを述べる^{注7}。分類における未来考慮型か現状考慮型かは、その作り出された状態がどの時点で意味があるのか、という視点である。さらに、未来考慮型の中の結果残存要求型か動作遂行要求型かは、未来における意味が、動作をすること自体にあるのか、動作による結果にあるのか、どちらなのかという視点である。つまり、これらの分類は、動作によって意図的に作り出す「意味のある状態」の「意味」に関する分類である。

注

1. ただし方言的用法では許容される。
2. テオクはテアルとの異同を指摘されることが多い。実際ほとんどの場合、会話文では「(準備としての) 動作→結果」という広い意味での因果関係において、どちらの側に焦点をあてるかという、動作主体の認知的捉え方の違いである」(山崎 1996: 23)。しかし、動作主の場所・位置・態勢の変化、つまり動作主の物理的存在の変化を表すテオクに対応するのは、「?? 2月に帰ってアル」「*二階建てのバスに乗ってアル」「*社長の椅子に座ってアル」ではなく、「2月に帰ってイル」「二階建てのバスに乗ってイル」「社長の椅子に座ってイル」というテイルである。

3. このテオクの用法とよく似ているのが、テシマウである。テオクは動作後の状態に表現の重点があり、テシマウは動作の完了に表現の重点がある。
4. 典型的な例を用いて説明したが、実際は境界線上のものも多い。また、テで表される動作を要求しない放置型には、未来考慮型の動作遂行要求型は存在しないと考えられる。しかし、「何もしないこと」あるいは「そのままにすること」を動作と認めれば、次の様な例が放置型の未来考慮型動作遂行要求型に該当する。

次の例は、9時までは電気で簡単にドアが開閉できるが、9時以降は手でドアを開閉しなければならず、閉めるのは楽だが、開けるにはかなりの力が必要だという状況下の会話で、現在8時45分だとする。

A：ドア閉めましょうか。

B：開けておいてください。そのドア、9時以降、私の力では開けられないですよ。

未来（9時以降）において、動作（ドアを開ける）が遂行できないから、現時点で「何もしない」あるいは「そのままにする」と考えられる。

5. 「9時には」となれば許容される。「は」によって「遅くとも」の意味が加わり、それによって、時間的幅が表されるからである。
6. 「まで」は放置型のテオクと共起することが多い。
7. 上記の注4や本文中の4-2.でも言及したが、「動作」の中に「意図的に何もしないこと」あるいは「意図的にそのままにすること」を含めれば、分類の放置型か処置型かは、その「動作」に関わる分類である。

参考文献

- 梶井恵子 (1997) 『日本語の機能表現形式－て形のすべて－』 凡人社
- 笠松郁子 (1993) 「『しておく』を述語にする文」『ことばの科学 6』言語学研究会編 むぎ書房
- グループ・ジャマシイ 編著 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』大修館書店
- 小泉保他編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 佐久間鼎 (1966) 『現代日本語の表現と語法《増補版》』(復刻版 (1983) くろしお出版)
- 高見澤孟他 (1997) 『はじめての日本語教育 [基本用語事典]』アスク講談社
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版
- 丸山敬介 (1994) 『教えるためのことばの整理 vol. 2』凡人社
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 山崎 恵 (1996) 「「～ておく」と「～である」の関連性について」『日本語教育』88 日本語教育学会
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房